Here Now Bestopia
ベストピア Bestopia
第435号
2023年05月号
パリ通信
第137号

希望をもつ自由の幸せ

世界の各地で戦火に苦しむ人々が増えつづける中、私たちの連休は天気に恵まれコロナ禍から解放された喜びが各地で見られた。平穏で終わって欲しいと願っていたが、震度６強の地震が石川県で起きた。それを悲しむように連休の最終日の空には涙があった。

報道から知る各地の人出はコロナ禍以前を上回ったと驚きか、はたまた、喜びを伝えようとしているのか複雑の様相であった。妻と共にいつもの諏訪の原の公園に散歩に出かけて驚いたことは、あまりの閑散であった。おそらく行楽地に出かけて行ったのであろうと推察はしたものの子供の数は明らかに毎年減少していることを感じた。

伸び伸びと遊べるこの公園は人気があり、老若男女色彩鮮やかに自然と対峙して美しい光景を醸し出している。私たちの大好きなところである。子供たちの声が段々と小さくなっていく、あの甲高い喜びの歓声が響いてこない公園は寂しい。5月5日は子供の日。私は祈った。元気で無事故で大きく成長してくれるように。余りにも事故が多すぎる日々に命の尊さが疎まれているような寂しさを払いのけられない。

少子化加速、社会維持の危機　人口減社会への備え不可欠 - 日本経済新聞

これから50年間でこう変わる

	2020年	2070年
総人口	1億2615万人（1億2340万人）	**8700万人（7761万人）**
高齢化率	28.6% 3.5人に1人	**38.7% 2.6人に1人**
生産年齢人口割合	59.5%（59.0%）	**52.1%（49.7%）**
人口に占める外国人の割合	2.2%	**10.8%**
出生数	87万3000人（84万1000人）	**50万人（45万3000人）**
出生率	1.33	**1.36**
平均寿命	男 81.58年 / 女 87.72年	**男 85.89年 / 女 91.94年**

報道によると総人口に占める子ども（15歳未満）の比率は1975年から連続して縮小して、11.5%となっている。（22年の国連の統計年鑑では米国18%、英国17.5%、中国とフランスが17.2%、インドは25.3%）合計特殊出生率は1.30を下回る予想があり、2050年には10%を切る。これからの50年間を予想した人口動態統計の要約を日本経済新聞の発表を見る

と次の表になる。人口を維持するには合計特殊出生数は2.06~2.07必要といわれている。人口を１億維持するには1.80が必要で政府の当面の政策になっているらしい。

別表を見ると2070年には生産年齢人口が50％を下回るのだから、生産力、消費力ともに著しい減少を免れない。2.6人で1人の高齢者を養っていかなければならない時が確実に来る。

防衛力強化「賛成」6割

現在、政府は「次元の異なる少子化対策」を検討しているが、与党も野党も的の外れたところで論戦を繰り返して国民の苦しみに目が向いていない。

国民の目は防衛力強化「賛成」６割、原発維持派が廃止派の2倍になった。岸田政権は時の利を得て、世界の憂うべき情勢を利用して安倍政権を忠実に受け継いだ。国民は誘導されてしまった。憲法改正も迫った。国民は少子高齢社会の中で戦争を準備する国になることを選んでしまった。一旦方向をもった世論の向きを変えることは少子化対策と同じくらいに難しい。平和政策であれ、戦争志向政策であれ財源が必要である。（下の写真は諏訪野原公園上空を富士山へ向かう飛行機）

本当に「次元の異なる少子化対策」、例えば、分娩費の無償化、子供手当の拡大と増額、第一子二子は3万円、第三子手当5万円、第四子7万円、第五子10万円を非課税で国家と企業が負担する。このような政策なら国民は消費税の増税に反対はしないだろうと私は思う。将来への償いをしなければならない世代の人々が今、そして将来も生きていくのだから、当然の負担というか、協力をしなければならない。

その為には、国民が信頼できる政府を作らねばならない。派閥年功序列で知識も能力もない大臣が選ばれていることに国民が黙って見ざるをえない状況を変えなければならない。

今年は地方議員選挙があった。地方議員ばかりでなく、国会議員の数を半減して財源に当てればどうだろうか。選挙制度、国会議員の数を国民の数に比例して半減していくという方向の憲法改正は必要であろう。半数に減らしていくと同時に小選挙区制を中選挙区制に改めることも必要である。差別を奨める訳ではないが政治家になるには最低限の使命感と知識と矜持を持ってもらうために立候補の条件をつけることも必要であると私は痛感する。

以上の私の希望が絶望に終わっても、更に必要条件を上げるならば野党が34％を占めることができる制度にくらいはできないものだろうか。民主主義下で恐れられていた多数独裁が支配的になった今、その独裁にブレーキをかけるにはそれくらいのことしかないだろうと私は思う。無党派層に期待してはならない。無党派層も結局は体勢派なのだから。

我が家から20m「希望の道」と呼んでいる。

こんなことを書きなが「希望をもつ自由のある幸せ」を思った。たとえ、何一つ叶わないにしても祈りは御心にかなえばいつかは実現すると。

紹介記事

朝日新聞2023年5月7日「天声人語」

　右から左へ。黒から白に。がらりと１８０度、正反対に変化するというのは、ひとにとって案外と易しいものではないか。心理学者の河合隼雄氏が随筆集『こころの処方箋（せん）』で書いている。難しいのはほんの少しだけ変わることだと

▼河合氏はある人から言われたのだという。「私も随分と変わりました。変わるも変わるも３６０度も変わりました」。ぐるり１周回って元に戻り、それで変わったとはどういうことか。言い間違えだろうが、それもまた「素晴らしい変化」だと河合氏は思ったそうだ▼世界保健機関（ＷＨＯ）が新型コロナの緊急事態の終了を宣言した。あすは日本でも「５類」移行がある。重大な節目に違いない。社会全体がいま、かつての日常に向け、大きく音をたてて動き始めている

▼この３年間、私たちの生活は変容を強いられた。失ったものはあまりに重い。死者は６９２万人。後遺症に悩む人も少なくない。いかにウイルスは怖いか。引き続きの警戒は当然である▼得たものもあっただろうか。孫と会えない。親と会えない。大事な人と過ごす時間の大切さを痛感した歳月だった。どこにでも行ける自由さ、歌を歌う楽しさ。失うことで知った、そんな思いを、忘れてしまいたくはない

▼きのう電車でマスクを外してみた。窓から入る爽やかな５月の風が、ほおに当たって心地よい。こうして私は３年前の私に戻っていくのだろう。でも、と思う。それは同じだけど、同じでない。３６０度変わった私である。

【視点】（常見陽平の天声人語）３６０度、変わる私

千葉商科大学准教授・働き方評論家

「考えが360度変わりました」人事をしていた頃、会社説明会のアンケートでこんな回答を見かけた。「変わっていないじゃないか」とつっこんだ。きっと180度の間違いだろう。ただ「考えが360度変わる」ことがないわけではない。めぐりめぐって、原点に戻る。しかも、同じではない。深みを増しているはずだ

▼世界保健機関（ＷＨＯ）が新型コロナの緊急事態の終了を宣言した。あすは日本でも「５類」移行がある。新型コロナから3年。実は感染者数も死者数も初期よりは増えている。一方で昨年あたりから「雪解け」「緩和」ムードが広がり、3月13日にマスクが任意となってからはさらに加速している

▼この3年間のことを忘れてはならない。しかし、いまや忘れてしまっていることも多い。スマホやSNS投稿を振り返り、いつからマスクを着用し始めたのか、予定が飛び始めたのかなどを思い出す。濃厚接触者となり外出できなかったこと、感染し悪寒に震え後遺症に苦しんだことなどもすっかり忘れている

▼最近になって、やっと大学4年生の教え子たちの素顔を見た。出会いはオンライン上で、ずっとマスクありの大学生活だった。サークルも学園祭も控えめだった。若者が青春を自粛せざるを得なかったことの重みは認識しなくてはならない

▼今日も明日も、生活は一見すると2019年仕様かもしれないが、同じではない。失ったものと得たものを考えたい。失われた命のことをまずは想いつつ

▼思えばこの3年間、感染症対策をめぐって沢山の議論をした。試行錯誤をした。価値観の違いから疎遠になった人も一人や二人、いやもっといるだろう。それでも明日はやってくる。360度の旅を振り返ってみよう。

このようにして私たちは5月8日を迎えることになりました。（コロナ終焉の日）
それぞれの人生の中で重い（想い）1000日でした。
今この時、全世界で「被災者にある方々」に祝福がありますように。

我が家の庭から見えた虹

パリ通信　137号

(137) フランス人日本へ行く

日本と同じくフランスも5月は祝祭日が多く絶好の旅行シーズンである。
5月1日(月)メーデー、8日(月)第二次世界大戦終戦記念日、18日(木)キリスト昇天祭、29日(月)ペンテコステ(聖霊降臨祭)、加えて4月22日から5月10日は春休み。バカンスを楽しみに生きているフランス人がじっとしている訳がない。

日本では新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが5月8日から「5類」に移行し、季節性インフルエンザなどと同じ扱いになった。2020年3月から続いてきた日本の厳しい水際対策がようやく終わった。外国人は入国禁止、入国72時間前PCR検査陰性証明書、コロナワクチン3回接種証明書、入国時PCR検査、空港内待機3泊4日、自宅隔離14日間・・・

日本は一気に遠くなり、突然引き離されてしまった家族、3年間の日本のコロナ対策は一体何だったのだろうと今も納得できないことが多い。空港検疫所の人手不足から「5類」への移行を待たずに4月29日から日本に入国するすべての外国人、日本人に対して求められるのはパスポートだけとなった。人が一気に動き始めた。日本航空、全日空、エールフランス、アシアナ航空始め、各航空会社がフランスと日本を繋ぐ路線便数を大幅に増やして、料金も徐々に下がり、コロナ禍以前に戻りつつある。さらには年明けから止まらない円安で、私の周りだけでも4、5月に日本へ行くフランス人が7名。日本旅行ブームになっている。

ジュリーとサラ(27歳と31歳のフランス人女性空手家)もコロナでのびのびになっていた念願の日本旅行を実現した。4月30日道着持参でパリを出て、5月18日「キリスト昇天祭」の休みが終わる5月21日までの3週間で、私が遠隔で滞在を手伝った。

東京に到着し先ず向かったのが文京区後楽にある「JKA公益社団法人日本空手協会総本部道場」だった。5月2日創立記念日と続くゴールデンウイークで日本での初稽古は翌週に延びた。観光目的で短期滞在する外国人が利用できる割引パス「ジャパン・レール・パス」を事前に購入してもらい東京から箱根に移動、クレマテイスの丘へ行くバスは二人を含めすべて外国人だったのに驚いた。

箱根から東海道線で大阪、奈良、京都、姫路を観光し、広島の宮島。大阪ではお好み焼き、京都では懐石料理の予算がなくおばんざい、宮島では焼き牡蠣を堪能した。大阪、京都、東京で待望の日本初稽古の夢も叶い喜びのメールが届いた。大阪城と姫路城はフランス人にも人気で天守閣を背景に撮れる写真スポットなどSNS、インスタグラムと言ったネットワークの威力には改めて感心させられる。
和食の小さなお店も何故か外国人で一杯だったりするので驚きだ。日本はどこへ行っても清潔で人も親切で食べる物も豊富で、5月の太陽にも恵まれて大満足の日本旅行となった。

日本に外国人が溢れる熱気に比べればフランスを旅行する日本人の数はまだ控え目である。カンヌ映画祭(5月16日から5月27日)、ブーローニュの森ではテニス「ロラン・ガロス」(全仏オープン)(5月22日から6月11日)が始まる。フランスの一番良い季節だ。観光だけでなく、パリで開催される国際学会や授与式なども再開された。

フランス公益社団法人「ルネサンス・フランセーズ」の日本代表部・瀬藤澄彦氏(常任理事会長)が栄誉賞を受勲すべくパリに来られた。「ルネサンス・フランセーズ」は1915年レイモン・ポワンカレ大統領により創立され、現在もフランス共和国大統領ならびに4人の大臣の後援を得て活動している。アカデミー・フランセーズ会員、大臣、欧州議会議長を歴任したシモーヌ・ヴェーユが他界するまで「ルネサンス・フランセーズ」の名誉会長を務めた。日本代表部が2018年に設立され、会員組織として運営されている。
国連ユネスコ事務局長を勤めた松浦晃一郎氏が名誉会長、創立以来運営に尽力されている瀬藤会長が最高位「ルネサンス・フランセーズ大賞」メダイユ・ドール(金メダル)を受賞される。文化交流を通して平和を築くことを目的とし、「文化、連帯、フランス語圏」をモットーに掲げている。ボランティアで会長を務めておられる瀬藤氏のご苦労に頭が下がる思いである。（古賀順子記）